

ATV 開局40周年記念

プラモデルパッケージ原画と 戦後の日本文化

BOX ART
ボックスアート



プレスリリース no.1



併設企画

「発掘された小松崎茂 - 1970年代のパッケージ原画を中心に」

□ 特別協力：株式会社バンダイ、昭和ロマン館、株式会社トイズワークス、
西村祐次 (M1号)

□ 企画協力：テクノプロ株式会社

※ 観覧料はボックスアート展に含まれます。

バンダイから発見された小松崎茂の原画約40点を本邦初公開!

AFV、飛行機、船、スーパーカーからSF、ロボットまで…、
僕らの夢と憧れをのせて、日本のプラモデルは今年誕生50年。

2008 9/20 SAT > 11/3 MON

主催：株式会社青森テレビ

共催：青森県立美術館

後援：青森県教育委員会、青森市教育委員会、東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社、河北新報青森支社、NHK青森放送局、エフエム青森、青森ケーブルテレビ

協力：株式会社タミヤ、株式会社ハセガワ、株式会社青島文化教材社、株式会社バンダイ、日本プラモデル工業協同組合、ロックウェーブ、有限会社工藤模型

特別協賛：スパンアートギャラリー

協賛：青森オフセット印刷株式会社、株式会社ホンダ四輪販売北・東北、トヨタカラー青森株式会社、H.F.G (h.uematsu)

企画：工藤健志 (青森県立美術館学芸員)、村上敬 (静岡県立美術館学芸員)

企画協力：モマ・コンテンポラリー

観覧料：ボックスアート展+アレコ 一般 1,300 (1,000) 円 大学生・高校生 800 (500) 円 中学生・小学生 500 (300) 円

ボックスアート+常設展 一般 1,700 (1,400) 円 大学生・高校生 1,100 (800) 円 中学生・小学生 600 (400) 円

※ () 内は前売り及び20名以上の団体料金 ※ 心身に障がいのある方と付添者1名は無料 (入館の際に証明できるものをご呈示ください)

【お問い合わせ先】

青森テレビ営業局営業推進部 030-8686 青森市松森1-4-8 Tel 017-741-2238 www.atv.jp

青森県立美術館 030-0021 青森市安田字近野185 Tel 017-783-3000 Fax 017-783-5244 www.aomori-museum.jp

創造の楽しみを与えてくれるプラモデル。戦車、飛行機、船、ロボット・・・、夢や憧れを形にして所有できるプラモデルは、1960年代の高度成長期に多くの子どもたちの支持を集め、その後工業製品としての進化をみせながら、今年日本で誕生50年を迎えました。ワクワクしながらパーツを組み立て形にしていく喜びは、プラモデルというホビーならではの楽しみと言えます。

そのキットの「顔」となるのが、ボックスアート（箱絵）です。消費者の購買欲を高めることを目的に描かれたボックスアートは、パッケージの装飾という役割を大きく超え、工作の過程で完成形を想起するための「資料」として、あるいはプラモデルを手にして空想の世界に遊ぶための物語を提供する「素材」として、人気を博します。

初期プラモデルのボックスアートは、戦時中に流布した視覚イメージを受け継ぎ、迫力ある劇的な様子が描かれ、多くの人々を魅了しましたが、特撮映画や劇画、アニメと並んで、そこには戦後の大衆文化の「主流」が示されています。そして、プラモデルを受容する層の意識の変化とともに様式を大きく展開させるなど、戦後の社会性や人々の精神史を検証する上でも注目すべき絵画と言えます。

本展は、戦時下の視覚イメージと、学校教材として活用された木製模型という2つのジャンルが、戦後どのような経緯でプラモデルという製品になっていったのかを様々な資料によって紹介するとともに、プラモデル草創期から現在に至るまでに送り出された時代を代表するプラモデルのボックスアート167点の原画を展示することで、プラモデルと日本文化の関係性を多角的に考察する美術展です。あわせて懐かしいプラモデルの数々や、国内を代表するモデラーによるジオラマ作品も展示するなど、プラモデルの歴史を具体的に振り返ります。

さらに併設企画として、近年バンダイから発見された小松崎茂の貴重な原画も多数公開。サンダーバードやウルトラマン、仮面ライダー、マジンガーZといった人気番組のプラモデル、玩具のパッケージを飾った40点の作品によって、1970年代を中心とした小松崎茂の仕事を紹介します。

プラモデルというジャンルをとおして戦後日本文化の歩みを一望できる本展を、心ゆくまでお楽しみください。

ボックスアート展とは …

全国で好評を博した展覧会が、
ついに青森県立美術館でフィナーレ！！

※ これまで大分市立美術館、静岡県立美術館、
島根県立石見美術館、福井市美術館にて開催

昭和初期から戦中期

「美術」や「大衆文化」のビジュアルイメージ



子どもたちが夢中になった
少年誌の付録や模型飛行機などの木製模型

プラモデルの箱絵＝ボックスアートの歴史を振り返り、その絵画的な魅力を検証

タミヤ、ハセガワ、アオシマ、バンダイといった国内を代表するプラモデルメーカーの全面協力によって、門外不出であった貴重な原画 156 点が初公開



戦後

新しい時代を象徴する「プラモデル」へ

小松崎茂、高荷義之、上田毅八郎、上田信（青森県出身）、開田裕治、石橋謙一、小池繁夫、天神英貴など時代を代表する作家の作品を展示

※ この過程を様々な資料によって紹介

プラモデル草創期の貴重なキットや、プロモデラー（山田卓司、金子辰也、島脇秀樹等）によるジオラマ作品も展示し、「模型文化」をトータルに紹介。

青森会場だけの併設企画として、近年バンダイから発見された小松崎茂のパッケージ原画約 40 点を公開する「発掘された小松崎茂」展も同時開催！

昭和初期－戦後期のビジュアルイメージ

私たちが魅了してやまない模型作り。その直接のルーツは昭和初期にありました。太平洋戦争直後に発足した国民学校では昭和17年から模型飛行機が正式な教材として採用されます。航空力学の入門として位置づけられたグライダーやプロペラ機を作って飛ばすことは科学思想の涵養に役立つとされ、国防的見地から大いに奨励されました。戦時下においても資源の確実な配当を受けたり綿密な規定をもうけた競技会が開催されたりするなど、模型作りが政府や軍から「公認」された活動として全国的なブームとなります。

昭和20年11月、GHQ/SCAPは日本政府に対し、飛行機の運航や生産はもとより航空力学の実績や教育まで禁止する指令を出します。これを受け、静岡等にあった木材加工業者たちもいったん模型飛行機の生産を中止、本立てや状差などの学校工作用木製教材キットを開発するようになりました。その後木製教材はソリッドモデルとなり、船や車など子どもたちの憧れの対象を次々と立体化していきます。これらはやがて小型モーターを組み合わせた動くキットとして発展を遂げ、現在のプラスチックモデルの隆盛へとつながっていくのです。

一方、昭和6年の満州事変を契機に「戦争」をモチーフとしたビジュアルイメージが日本中に氾濫するようになりました。「少年倶楽部」等の雑誌や現在「戦争画」と称される絵画作品のイメージを通じて、当時の子どもたちは戦争や飛行機、そしてそれらが活躍する情景に胸をときめかせていたようです。感情を込めた筆致で流れる雲や高くうねる波などを描いたその劇的な描写は、戦争という現実を越え、現在の漫画やアニメ、ゲームに通じるような感覚で当時の子どもたちを空想の世界に誘い、興奮させていったのではないのでしょうか。

注目すべきは、そうしたイメージが雑誌や書籍、絵葉書等の複製物によって普及していったこと。戦後、様々な複製メディアを通して爆発的な発展を遂げ、現在世界に誇る大衆文化を築き上げた「日本」の特質はすでに戦時中から認めることができるのです。戦後、子どもたちの夢をかきたてたボックスアートもそういったイメージを流通させる有力な担い手の一つだったのです。

本セッションでは、昭和初期から戦中にかけて流行した飛行機模型や一般に広く浸透していた戦争のイメージを各種資料によって紹介し、当時の大衆文化の諸相を検証するとともに、戦後になって模型が「教材」から「ホビー」へと変化していく過程を様々な教材模型やソリッドモデルで振り返ります。



戦中の飛行機模型



講談社発行「少年倶楽部」「幼年倶楽部」付録より



講談社発行「少年倶楽部」「幼年倶楽部」付録より

国産プラモデルの誕生と高度成長期： 1960年代、夢と憧れのイメージ

昭和33（1958）年12月、マルサン商店が「プラモデル」という商標を用い、「原子力潜水艦ノーチラス」、「B-47 ストラスジェット」、「PT-212 哨戒水雷艇」、「ダットサン1000」のディスプレイ模型を販売。この4点が、現在、日本で最初に発売されたプラモデルとされています。そして翌昭和34（1959）年には、日本模型（現ニチモ）が動力を内蔵して動く「伊号潜水艦」を発表、動かして遊べるプラモデルとして好評を博しました。この年の7月からはマルサン商店が提供するプラモデル番組「陸と海と空」（フジテレビ）の放映も始まり、プラモデルという新時代のホビーは瞬く間に普及していったのです。続く昭和35（1960）年にはタミヤも1/800「戦艦大和」でオールプラスチック製の模型を発売、11月にはイマイが初のキャラクターモデルとなった「鉄人28号」を発売するなど、各メーカーもこぞってプラモデルの開発に乗り出していくことになります。

高度成長の時代相に呼応するかのよう大量生産、大量消費が可能で、なおかつ金型を製作し、プラスチック樹脂で成型するためモチーフが再現しやすく、また組立も容易であったことから、プラモデルは子どもを中心として爆発的な人気を集めていきました。立体化されたのは、子どもたちが憧れる「強いもの」、「かっこいいもの」。その象徴である戦車や船、飛行機、宇宙船、SF物語に登場するメカニック等々。各種テクノロジーの発展と、それがもたらす「幸福な現在」と「明るい未来」のありさまを自らの手で確認する「素材」として、子どもだけでなく大人もまたプラモデルづくりに熱中する時代が到来したのです。東京タワーや新幹線、オリンピックスタジアムから漫画のキャラクター、さらには動物や昆虫まで、ありとあらゆるものがプラモデルになった当時の状況は、ある意味で拡大の一途をたどる人々の欲望を象徴する出来事だったと言えます。

この時代のパッケージを飾ったボックスアートは、それまでの商品名のみが大きく記されたエアプレーンやソリッドモデル等のパッケージとは大きく異なり、新しい時代の新しいホビーにふさわしいものが模索されました。世は「戦記」ブームの只中。タミヤは雑誌の挿絵等で活躍していた人気イラストレーター小松崎茂をいち早く起用し、昭和36（1961）年に発売された1/35「ドイツ パンサータンク」で大きな話題を集めると、他のメーカーも一気に追従。受容層の感情を刺激し、無限の想像力を喚起する「情景」を描くというボックスアートの様式が瞬く間に確立されていくことになります。



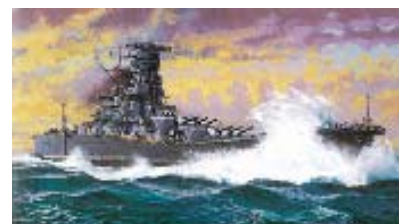
タミヤ 1/35 「ドイツ パンサータンク」 1961年 画：小松崎茂



タミヤ 1/50 「日本海軍零式艦上戦闘機 52型」
1963年 画：小松崎茂



ハセガワ 1/72 「二式大艦」 1966年 画：六車弘



ハセガワ 「日本戦艦 武蔵」 1962年 画：上田毅八郎



タミヤ 1/48 「スウェーデン「S」バルカン新鋭戦車」
1969年 画：高荷義之

プラモデルの発展と日本文化の成熟： 1970～80年代、質の向上とマニアの成立

昭和40（1965）年、日本中を席卷した「スロットレーシングカー」ブームによって海外製のキットが多数国内に輸入されましたが、特にCOX社（アメリカ）のパッケージはそれまでの日本のキットとは一線を画す白を基調にした高級感あふれるものでした。すぐさまタミヤは反応し、シンボルマークを一新するとともに、白を基調にしたパッケージを送り出すことで、それまでの玩具的なスタンスから一歩抜け出した、大人も楽しめるホビーという印象を与えることに成功します。パッケージに「デザイン」という概念が持ち込まれた大きな要因としては、高度成長が徐々に落ち着きを見せ、戦後文化が成熟期に入ったことも強く影響しているように思われます。そして、製品としてのプラモデルもまた需要層の成長とともに大きく変化していくのです。

昭和42（1967）年7月、現在まで続くタミヤの1/35「ミリタリーミニチュアシリーズ」が発売開始。昭和44（1969）年から、グンゼ（現 GSI クレオス）がプラモデル用塗料や改造工作のための商品を次々に開発。昭和45（1970）年1月にはグンゼ産業レベル、ハセガワ、モデルアートの共催でスケールモデルとしての完成度を競う「ブラブレンコンテスト」がはじまり、同じ年の6月にはタミヤが『情景写真集パチット集号』を発行。さらに昭和48（1973）年からは、タミヤの1/35ミリタリーミニチュアシリーズの兵隊人形を使った「人形改造コンテスト」がスタートするなど、組み立てて遊ぶ「玩具」から、改造や塗装を施し、いかに現実へと近づけるかに重きをおいた「縮小模型」へとプラモデルの楽しみ方は移り変わっていきになります。

昭和48（1973）年はオイルショックが起こり、資材の高騰によってプラモデルの価格も幾度となく改訂され市場が混乱した時期。子どもたちのほとんどがプラモデルに熱狂していた時代は去り、支持層は後に「マニア」と称されることとなる一部の愛好家へとゆるやかに移り変わっていきます。停滞期に入った日本社会を反映するかのようには、プラモデルとなるモチーフも次第に整理され、数から質への転換が図られていったのです。様々な技術革新のもとに、プラモデルの工業製品としてのクオリティもこの時期急速にアップしますが、ボックスアートもまた需要層の感情を刺激するナラティブなものから、フォルム、ディテール、色彩、マーキング等を忠実に再現した資料性の高いものが好まれるようになっていきました。

一方で、1970年代の後半にはスーパーカー・ブームが起こり、各メーカーは競ってカーモデルを開発。ほぼ同時期にアニメ・ブームも発生し、1980年代初頭にはSFキャラクターモデルが次々に商品化されるなど、プラモデルの対象が「大人向け」と「子ども向け」とに大きく二極化していったこともこの時代の大きな特徴と言えるでしょう。



タミヤ 1/35 「アメリカ M60A1 シャイアン戦車」
1970年 画：高荷義之



タミヤ 1/35 「ドイツ 88mm 砲 Flak 36/37」
1972年 画：大西将美



タミヤ 1/700 「日本航空母艦 信濃」 1971年 画：上田毅八郎



タミヤ 1/24 「ランボルギーニ・カウンタック LP500S」
1978年 画：島村英二



タミヤ 1/20 「マクラーレン MP4/4」
1988年 画：川上泰弘

デジタル化社会とプラモデル： 1990年代～、嗜好の細分化と技術革新

1990年代は、高度情報化社会の到来によって嗜好が細分化し、大量生産と大量消費に支えられた国民共有のモチーフが急速に失われていった時期でもあります。多様な価値観を等しく認めるこうした動きの中で、プラモデルという趣味の分野でもジャンルの細分化が進んでいきました。もちろん子ども向けのプラモデルも決して消えることはありませんでしたが、一般的なプラモデルと言えば、価格的にも、組立の難易度という面からも、もはや子どもを対象としたものではなく、完全に大人に向けた商品が中心となっているのが現状と言えます。

1990年代以降、プラモデルの開発現場にもデジタル技術が普及し、CAD/CAMシステムによる設計・製造技術によって組み立てるだけで精密な縮小模型が完成する商品が次々と市場に送り出されていきました。人々の尽きることのない欲望に後押しされるかのように技術力も驚異的に進化し、もはやモチーフの細部まで正確に表現したキットは当たり前、同じモチーフでも生産された時期、使用された場所等によるわずかな差異を完璧に再現したり、プラスチック樹脂以外の素材を導入してパーツの精度を上げたり、組み立ての行程をいかに楽しませるかといったプラスアルファの部分で各メーカーがしのぎを削る時代へと突入しています。フォルムとディテールが、ともに極限まで再現された現在のプラモデルは、いまだ日々進化しているのです。

この時期のボックスアートもまた時代性を反映して、コンピュータグラフィックス（CG）による描写が多くなってきました。夢や物語を紡ぎ出すための素材であったプラモデルが、需要層の果てしのない欲望を投影する「装置」へと変化した時、ボックスアートもまた想像力を刺激する劇的なものから、CGが得意とするモチーフの精密描写へと移り変わってきたと言えはしないでしょうか。



タミヤ 1/35 「アメリカ強襲水陸両用兵車 AAVP7A1 アップガン シードラゴン」 1992年 画：高荷義之



タミヤ 1/35 「アメリカ40トン戦車運搬車ドラゴンワゴン」 1998年 画：江間浩司



ハセガワ 1/48 「AH-64D アパッチロングボウ」 2001年 画：小池繁夫



タミヤ 1/48 「ブリistol・ボーファイター-MK. II」 1997年 画：G.OLIVEREAU



ハセガワ 1/24 「ウィリアムズFW14B」 1992年 画：和田隆良

キャラクターモデル

日本ではじめてプラモデルが発売されたわずか2年後の昭和35（1960）年11月、今井科学が国産キャラクターモデルの第一号となる電動歩行の「鉄人28号」を発売。昭和初期の木製飛行機模型から一貫して「動く」ことに重点をおきつつ発展してきた日本の模型が、多彩なギミックを盛り込むことのできるロボットや漫画のキャラクターをモチーフとして求めることは、ある意味で自然な流れと言えるかも知れません。

その後、今井科学は様々なキャラクターを次々とプラモデル化し、「マンガ模型のイマイ」と称されるようになっていきます。さらに昭和40（1965）年には、「サブマリン707」や「007」といった海外コンテンツのプラモデルも商品化、続く昭和41（1966）年12月にはサンダーバードシリーズの第一弾「サンダーバード2号」が発売されることになります。同シリーズは小松崎茂によるボックスアートの魅力も加わり大ヒットを記録しますが、さらに「ウルトラマン」（1966年）の放映にともなう怪獣ブームも加わるなど、1960年代後半はキャラクターモデルの第一次ブームとなった時期でした。タミヤも昭和44（1969）年にイギリスのドラマ「ジョー90」のプラモデルを発売するなど、各メーカーが競ってキャラクターモデルを開発していったのです。

しかしあつという間にブームは沈静化し、昭和44（1969）年7月にはキャラクターモデル最大手の今井科学が倒産。その金型の一部と工場設備は、昭和42（1967）年に経営破綻したコグレの資産を受け継ぎプラモデル業界に参入していたバンダイが取得、バンダイ模型として本格的にプラモデルの開発がスタートします。現在、「ガンブラ」の愛称で親しまれるガンダムのプラモデルを発売しているバンダイですが、そこには日本ではじめてキャラクターモデルを開発し、サンダーバードブームを作った今井科学の遺伝子が受け継がれているのです。

熱狂的ブームは去ったものの、バンダイやアオシマ、そして再建された今井科学を中心にプラモデルのジャンルとしてのキャラクターモデルはしっかりと根をおろしていきました。1970年代半ばの「マジンガーZ」や「仮面ライダー」のヒットに続き、昭和53（1978）年には「スターウォーズ」、「さらば宇宙戦艦ヤマト」が公開されSFブームが頂点に達すると、その直撃世代がやがて1980年代に起こるガレージキットブームの担い手となったり、現在の玩具ブームを支える大きな支持層にもなっていたのです。

そして昭和55（1980）年に「機動戦士ガンダム」のプラモデルがバンダイから発売。翌年の映画版公開とともに空前のブームとなる「ガンブラ」は、架空のモチーフでありながら縮尺が表示されるなど、明らかに従来のものとは異なるスケールキット的なアプローチで開発されたものでした。それまでのキャラクターモデルの印象を大きく変えた「ガンブラ」の方向性は他メーカーにも大きな影響を与え、昭和58（1983）年をピークに第二次ブームが起こり、新製品が次々と市場を賑わせていくようになります。そして、新しい技術が投入され進化を続ける「ガンブラ」を筆頭として、キャラクターモデルは今や一大市場を形成するに至っています。



タミヤ「スーパーカー」1962年 画：小松崎茂



イマイ「パーズル人形付サンダーバードTB2号」1971年 画：小松崎茂



アオシマ「光の戦士ダイヤモンド・アイ サンダー号」1973年 画：根元アートセンター



バンダイ 1/72「ダンバイン」1983年 画：開田裕治



ハセガワ 1/72「ジェットビートル」2003年 画：小池繁夫

関連イベント

※ すべて参加無料ですが、展覧会チケットが必要になります。
詳しくはホームページをご覧ください。

■ シンポジウム「ボックスアート展とは何か」

本展企画者が展覧会のコンセプトや見方についてお話しします。

日時：9月20日（土） 10：00 - 11：30

パネラー：村上敬（静岡県立美術館学芸員）

工藤健志（青森県立美術館学芸員）

モデレーター：中村光信（モマ・コンテンポラリー）

会場：展示室 A

■ ワークショップ「ボックスアートの出来るまで」

ボックスアートはどのように生み出されるのか、第一線で活躍するイラストレーター開田裕治さんが、そのプロセスを解説します。その体験をもとに、君もボックスアートを描いてみよう！

講師：開田裕治氏（イラストレーター）

日時：9月20日（土） 13：30 - 17：00

会場：ワークショップ A、展示室 A

定員：20名（要申込）

※ 9月1日より電話もしくはファックスにて美術館までお申込みください。先着順で受け付け、定員になり次第締め切らせていただきます。
なお中学生以下の参加者は保護者の付き添いが必要です。

■ 講演会「戦後日本文化とプラモデル」

講師：田宮俊作氏（株式会社タミヤ代表取締役会長）

日時：9月21日（日） 14：00 - 15：30

会場：美術館シアター

定員：200名（当日先着順）

■ 「プラモデル黎明期とハセガワ」

講師：長谷川勝人氏（株式会社ハセガワ常務取締役）

日時：10月5日（日） 14：00 - 15：30

会場：美術館シアター

定員：200名（当日先着順）

■ 「良質なボックスアートに出逢えた少年たちは幸せである」

講師：加藤智氏（元バンダイ「模型情報」編集長、
株式会社キャラアニ代表取締役社長）

日時：10月19日（日） 14：00 - 15：30

会場：美術館シアター

定員：200名（当日先着順）

■ ワークショップ「ダンガンレーサー青森カップ」

ダンガンレーサーを組み立ててレースをしよう。目指せ優勝！

日時：10月12日 13：30 - 16：30

講師：島脇秀樹氏（プロモデラー）

横山一敬（青森テレビ営業局局长）

定員：30名（要申込）

※ 9月1日より電話もしくはファックスにて美術館までお申込みください。先着順で受け付け、定員になり次第締め切らせていただきます。なお中学生以下の参加者は保護者の付き添いが必要です。

■ 「〈航研機〉復元ものがたり」

講師：大柳繁造氏（青森県立三沢航空科学館館長）

日時：10月26日（日） 14：00 - 15：30

会場：青森県立美術館シアター

定員：200名（当日先着順）

■ 「戦後日本のサブカルチャー ～文化の本流ここにあり？」

講師：工藤健志（青森県立美術館学芸員）

日時：11月2日（日） 14：00 - 15：30

会場：青森県立美術館シアター

定員：200名（当日先着順）

■ ギャラリートーク

日時：9月23日（火・祝）

10月13日（月・祝）、26日（日）

11月3日（月・祝）

各 14：00 -

会場：展示室内